

覚えるということ

上 田 眞 一 郎

奨励者紹介〔うえだ・しんいちろう〕

同志社国際中学校・高等学校理科教諭

神はわたしたちの避けどころ、わたしたちの砦。
苦難のとき、必ずそこにいまして助けてくださる。
わたしたちは決して恐れない
地が姿を変え
山々が揺らいで海の中に移るとも
海の水が騒ぎ、沸き返り
その高ぶるさまに山々が震えるとも。

大河とその流れは、神の都に喜びを与える
いと高き神のいます聖所に。
神はその中にいまし、都は揺らぐことがない。
夜明けとともに、神は助けをお与えになる。
すべての民は騒ぎ、国々は揺らぐ。
神が御声を出されると、地は溶け去る。

(詩編 46編2—7節)

同志社国際中学校・高等学校で理科の教員をしております、上田眞一郎と申します。今日は、同志社大学の京田辺水曜チャペル・アワーにお招きいただき、ありがとうございます。

私たちも、同志社の中の一つの中学校・高等学校ですので、毎朝、礼拝の時間をもって一日が始まります。礼拝では、全教員が順番にかわるがわる奨励をしています。今日は、私たちが毎日の礼拝で、生徒たちにどんなことを話し、語りかけているのかを感じていただければと思っております。

ともに過ぎた時間が記憶に残る

私たちの学校は、大学の隣にありますので、よく卒業生が訪ねてくれます。

訪ねてきた時、多くの卒業生がまず言う言葉があります。「先生、久しぶり」これは挨拶です。その後です。「覚えていますか」、この質問には、いつもドキッとさせられます。顔には見覚えがあるのですが、なかなか名前が出てこない。でも、そんな時私は居直って、こう答えることにしています。「よく覚えているよ。ところで、君は誰だった」。一瞬、卒業生は固まりますが、きちんと名乗ってくれます。でもその後、いろいろ記憶をたぐりよせて、「君はテニス部だったね」とか、「君はシンガポールだったね」(本校は多くの帰国生徒

が通う学校です)とか、あとは生徒会や行事で活躍したこと、挙句の果ては「授業の時、右の方にいたね」など、思い出すことを洗いざらい言います。そうすると、卒業生たちは「よく覚えてるなあ」と目を丸くしますが、こっちは必死です。でも、そうしているうちに、卒業生は生徒だった当時の顔に戻っていきます。名前の記憶はなくても、人となりや、ともに時間を過ごしたこと、心に留めたことは記憶として残るものです。でも本当は、これが卒業生のことを覚えているということなのだと思います。

災害のおこうに人がいる

さて、前置きが長くなりましたが、今日、お読みいただいた聖書のことに少し触れたいと思います。

「詩編」をお読みいただきました。「詩編」というのは、神を賛美する歌を集めた歌集です。イスラエルの統一王朝時代と言いますから、紀元前1000年ぐらい、偉大な王ダビデが統治していた頃のことです。今日読んでいただいた46編も、この世に天変地異が起こっても、国の民が大騒ぎしても、神様が必ず守って助けてくださる、と神様を賛美しています。

私は理科の教員なので、ついその天変地異の記述に目を留めてしまいます。このイスラエル地方、アラビア半島のあたりというのは、地学的には非常に興味深い地域です。日本も最近地震が多いですが、このあたりも地震多発地帯なのです。日本は4つのプレートがぶつかり合っているところです。そこで、地震が発生します。火山もたくさんあります。聖書の舞台となったアラビア半島のあたりも、3~4枚のプレートの境界に当たります。アフリカとの間の紅海は、プレートが離れていって海になりました。アラビア半島の西部には、聖書にも登場するヨルダン川が南北に流れています。その北の端には、イエスが活動していたあたりのガリラヤ湖、南へ行くと体が浮いてしまうという死海がありますが、このヨルダン渓谷もプレートの働きによる裂け目です。ですから、おそらく地震も起こったでしょうし、アラビア半島の沿岸には火山も点在しています。

今日の聖書の言葉の「地が姿を変え 山々が揺らいで海の中に移るとも」とは、まさに地震でしょうか、火山でしょうか。「海の水が騒ぎ、沸き返り その高ぶるさまに山々が震えるとも」と、津波を思わせませう。そのように読むと、この聖書の記述は、単に比喩的に天変地異を表現したのではなく、当時の人たちが実際に自然現象を体験していたのだらうと想像できます。

地震などの自然現象は、現在知識のある我々でさえ恐ろしいのですから、当時の人たちにとっては、想像するだに恐ろしかったらうし、その不安は、それはそれは大きなものであたらうと、その人たちの恐怖と神にすがりかたを想像してしまいます。少し飛躍が過ぎるかもしれませんが、この人々の思いを想像することが、実は案外大切なことではないかと思うのです。

私は、理科の授業の教材として、先日来の豪雨やその少し前の大阪の地震など、実際に起こったことを取り上げます。でもその時、その教材の向こう側に、実際にその当事者として、その現場に必ず人がいること、その人たちが災害に遭遇しておられるということを、心のどこかに置いておく必要があると思っています。

また、災害が起こると、よくその対応の是非や責任の所在が議論されます。再発防止に努めることは大切なのですが、その議論が進むにつれ、被害にあわれた当事者の方の存在がどんどん薄れていくように思えてなりません。

授業にせよ、議論にせよ、出来事を客観的に語る我々の心の中に、どれだけ実際に災害にあった人たちが存在しているのかが問われるのではないのでしょうか。

「覚える」ということ

ところで、私の聖書には、7年前に配られた一枚の祈りのカードがはさんであります。そのカードには、「東日本大震災を受けて、祈りをともに」と書かれています。聖書を開いたときに、いつも思い出して、被災された方を「覚えて」祈りを合わせられるように・・・という思いで配られました。それ以来、ずっと聖書にはさんであります。

「覚えて」祈る。この「覚える」という言葉。今日の奨励のタイトルにさせていただきましたが、聞きなれない方にとっては違和感のある響きかもしれません。単語を覚えるとか、人の名前を覚えるという、単に記憶するというのではなく、その人のことや出来事を心に留める、というような意味なのだろうと思います。

出来事を通して、人の思いや状況を想像して心に留める気持ち。その出来事が、大きいことであれ小さいことであれ、特別の出来事であれ日常のことであれ、また嬉しいことであれ悲しいことであれ、その人を「覚える」という気持ちをもつということが、一番大切な気持ちではないかと思うのです。

そんなことを感じさせてくれた、一つの出来事をご紹介します。

今から半年ほど前、今年の2月7日のことです。今年の冬は、例年になく雪の多い冬でした。この日の北陸地方は、その前日から降り続く雪で何十年ぶりの記録的な豪雪になりました。平地でも、一晩で積雪3m以上のところもあったといいます。福井県では、北陸の沿岸を走る国道8号線に、何台もの車が立ち往生。当然、食料も水もなく、車に閉じ込められた多くの人がありました。雪に埋められると一酸化炭素中毒の危険もあることから、エンジンを止めて暖房も効かない中で過ごした人もいました。

そんな時に、その人たちに料理を作って配った全国チェーンの中華料理店がありました。その日、お店は前日からの雪のため臨時休業をしていました。でも、ニュースを聞いて、急遽、店にあった食材で、できるかぎりの料理を用意して配られたという話でした。

これだけ聞くと、えらいねえ、優しいねえ、で終わってしまいますが、もう少し、深く考えてみたいと思うのです。

なぜ、このお店（副店長さんの提案だそうです）は、そのような行動に出たのでしょうか。ただ単に、大変だ、かわいそうだ、というのではなさそうです。

その答えは、新聞（『朝日新聞』2018年2月7日朝刊）に小さく書かれたコラムにありました。

それによると、この行動に出た理由は、23年前の阪神淡路大震災にありました。今回、料理を配ったお店の副店長さんは、23年前の震災当時、兵庫県のある中華料理店でアルバイトをしておられ、そこで被災されました。被災した人は、水もなく、店が閉まっていて食べるものも手に入らない状況。その時、アルバイト先の店長さんに呼び出され、水も出ないのに店を開け、店にあった在庫の餃子を一日中焼き続け提供されたとのこと。その時に、食べ物を求めて店を訪れた被災した人たちの、餃子を食べた時の笑顔が忘れられないといいます。今回、雪で立ち往生した人たちのニュースを聞いた時、23年前の情景が心によみがえったのでしょう。そして、居ても立ってもいられず、今度は次の世代のアルバイト君を呼び寄せて、今回の料理を配るという行動に出たとのことでした。

この副店長さんの思いというのは、「助けたい」「力になりたい」という一心だったのでしょうか。そこには、大変な事態そのものへの思いだけでなく、23年前の情景が重なって、その渦中にある人への思いが強く後押ししたことが明確に読み取れます。私たちが目にするのは、出来事に遭遇し行動に出た副店長さんの姿ですが、その副店長さんの心の中には、立ち往生した車の中で大きな不安の中にいる人たちの存在があります。副店長さんの、そこにいる人たちのことを想像する姿こそが、渦中の人たちを「覚える」ということなのではないでしょうか。

美談として語られる出来事そのものに意味を置くのではなく、副店長さんの、渦中の人たちを「覚える」という姿勢にこそ意味が置かれるべきなのでしょう。

人を「覚えて」生きる

聖書の言葉をもう一つ紹介して、終わりにしたいと思います。

「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」（ローマの信徒への手紙12章15節）。

私たちの学校の卒業式で、卒業生を送り出す時に必ず読まれる聖書の言葉です。

喜んでいる人を、何かいいことあったのかなあと第三者的に見るのではなく、喜びを共有し、ともに喜ぶこと。本当につらい思いをしている人の気持ちを想像し、痛みを分かち合うこと。具体的に行動に移すことができなくても、想像する気持ちをもつことはできます。その人を「覚える」ことはできるのではないのでしょうか。

これからも誰しもが、直接的にせよ間接的にせよ、いろいろな出来事に遭遇することでしょう。出会いもあるでしょう。その時に自分がどんな場にあっても、その出来事の向こう側にいる人たちのこと、出会った人たちのこと、またその向こう側にいる人たちのことを「覚えて」歩んでいきたいものだと思います。

2018年7月11日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録